



火用心

花紅葉粉吐

中

71
2950
2





新編東都咄巻中

一頃日或人の新に平安城に都に今年まで既に千の

み川ろとあん思ふより上様も誠り御信

ふりく大掌會たがし御執行ありしにわは暦數

此充るを後ひ祭らせあふより実小さらすも

りりあんと年代略記を考ふ相武天皇延暦十三

年平安定都とあるせし所より今も天明八年ま

でと算へんれば支干九百九十五年より後

千のといふべし暦代に所舊記ありて委しくさ



三出巻

らバ十百のよほるこもかりぬべし治世安民此
所惠より天下此災を京地よはせぬめあひ難苦を
万民とぞとふけあふとたしバ飲食腹よりみち
寒さふ襦をかさぬる我軍りらとあしとやい
見え怒きありとや見え

一諸所焼失れ時刻をたすましなよあつと実や火
感陽と焼しハ三月餘もよだぬと古よ書あも記
したまバ此度の火とても徳所あび大社大寺
たど焼るふ三時とに時をかすふけはあなから

一 小町刻とさしがけきと只その概と記とれ

一 正月晦日の曉知れ上刻洛東團栗の通りより出火

一 石垣町川端に条下二町目より五条橋通まで五町

一 ありまりれ間忽焼廣がる風ハ寅知の方より吹く

一 月中刻風辰己の方より吹き寺町永養寺へどび火

一 移る是洛中へ焼入し始めあり

一 月下刻藪の下通りと西へ焼佛光寺所門跡へ火

一 移りき通り四條までの間焼廣がる

一 月辰の上刻因幡薬師菅大臣の社等焼ふ

一月中刻六角堂及びは色諸所焼廣がは

一月下刻堀川色より壬生の野まで焼ぬける

一月己上刻三条通まで焼廣がり下みくハ五条通れ

中程高倉烏丸の東西と南れ方風上へ焼ゆく火

後赤坂寺の方所を通と七条のさうひ根敷所敷れ際より下
寺所及び赤坂寺の方と東へへけ出ふ糸寺町本屋町川原町所
焼町より警報寺れ方
すて振と焼まよる

一月中刻下刻の間中京ゆく三条通れ東西諸所よ

焼廣がは

一月午れ上刻東本願寺の所前通門前焼る所跡

の火消役人大さふ防ぎ働くとどども都てこの巻れ

町家井れ内へ諸道具と投入し水一滴あり

ふれれりんへ常ふ公坊有べしさきども多人殺

をりて瀦々寺内へ防ぎゆあり下れ殊殺や

町焼のり根敷所敷大は危く是より火東へ焼

免ぐは

一月中刻五条色柳の馬場より東れ方所新堂れ

方へ急げゆく

一月下刻三条通の西れ方所焼廣がりそれより

神泉苑それ色の所を焚へ火移る

一日未の上刻寺町より四條より北へ焼のりて誓願寺れ境内南乃方れ寺中方まで焼うせ寺町

此よりより一たび所よりて焼止まる誓願寺本堂

より北のこは

一日中刻西れ方を焚方及び此色諸所へ火移る

一日下刻所旗町本を所川原所を四條より北の方へ

焼ゆく西れ方よりハミ色れ所を焚へ火移る日

ぐし通よりや町の色へ焼ゆれ二条れ西野中不左

所の小家八九軒ありてのこは焼うせぬは附

五条大橋焼る

一日申の上刻雨あり出へ南風とげく諸所れ火

勢よりとくさのんたり本因寺へ北の方より火移り

寺内と南へ焼廣がり西本願寺れ鼓樓へ火うはる

所門焼失れ此火風上張よりて段々東南へ焼廣る

一日中刻上京新町よりより千本通を限り西條を

北へ焼廣がる

但千本通

まてハ出

一月下刻出水通西の行はめ七本松懸よそ寺九ヶ寺をける
 北の方ハ紫野今宮所旅まで焼ぬけたりは時風よあや
 止む方ふちりく火勢おころく寺これ子鐘追つさ
 やとせおしハお音志のまりたり町のぶくたりまば
 禁庭れ所方あく海しまさんとくハりへる是と
 おうそ京都れ内七歩をりれ焼失ありとうや
 一月著方西の上刻西山の方よ墨を流せらるがぶく黒
 雲起り乾の方より大風俄に吹起り雨志れをり
 降火勢大ふ熾んふ東南北方へ吹立る程は所

れ方忽ち危しは時所公郷方おのく所立退梅さふ
 風雨殊ふ烈し
 一月夜成の刻所築地の北れ方道正菴のあよりり
 公家所を補へ火迫付く火消大名とくく此色り
 ち日けしそ命を限ると火を防ぐは時同を町へ
 火移り二町斗焼る
 一月亥の刻公家所を補諸く小火うけらとつども防ご
 けくく志むくは所よさく也扱誓願寺ハ先刻未れ
 刻寺中方限り焼とまりしが焼出されの老ども夥し

乃古云云

く本堂の内又ハ縁れあさなご入々風雨を志のたぐる
 内は時刻はあさなごにひびあく西の方より車輪れ
 ぶとれ飛火三ツ口投けるごとく来るしくんが忽ち
 燃上り哲対ふ焼失と是ふより怪我人等あしと
 あん

一日子の^上刻北^北方鞍馬口の方へ焼ぬける

一日中刻東^東が殿寺のうら防ぐとどもは時刻ふて
 終り裏通り新町の方より寺基所へ火移り是より
 御殿中堂阿孫隠堂大門をの諸堂へ火移り丑寅れ

刻の間は悉く焼失と

一日下刻公家^{公家}所を舗あく焼失と

一日世の上刻上京寺町れりより本居町の方と南

へ^下刻下れ^下所靈の社一条^{一条}革堂^{革堂}へ火移る

一日中刻^中所^所急のうら焼ふは時あつて

一日下刻上京より^上諸所^{諸所}焼めぐり本居町三条下町

松平土佐守^{土佐守}殿^殿所^所を^をあれ^あ際^際より^よ焼^焼止^止ふ^ふ是^是洛^洛中^中れ^れ焼

とまりたり

一日曉寅の上刻洛東頂妙寺新地へ火飛りはり二条

新地しんちの方町かたまち家や雨あめ焼や廣ひろがふ

日中刻ひちゆうこく下刻げこくふあり火洛中洛ひらくちゅうらく外がひよ充溢あふま一いつ日にちよ火ひののも立昇たてのぼりのかの方かたちちり

一いつ月げつ二に月げつ朔日しやくにち卯うのの一いつ天てん小せう諸所しよじよ一いつ面めんり焼や萌もれて下げ火ひとあるとあるを刻こくより風かぜも少せうしの静しずまりりし

一いつ月げつ辰しん巳しの刻こくよよて頂妙寺てうめうじよ及およびび北きた新地しんち二条新地町にじょうしんちまち悉しつく焼やははくく一いつ東とう北きた方かた寺院じいんのの際さいしして焼や止とり

南なんの方かた壇王法輪寺だんおうぼんじよ北きたの方町家かたまちやよよく焼やややすすりり

一いつ日にち午ごの刻こく洛中洛外らくちゅうらくがひとも大方おほひ消火しょうかして傍かたく火ひの入いりり去さるる所ところ市築地いちつきぢなど追おひて焼や出いりりああかかししここ又また出火しゅつか也なり

一いつ日にち二に日にちああけけははぐぐめめく晴はるる餘あまををれれ申まをふふ日にち輪りんれれ老らうりりとと見みるる見み女めれれ軍ぐん老らうりりおおあありりとと大だいはは茶ちやののりりももくくりり

かかりりそそ日にちれれ申まをのの刻こくごごううととふふりりくくのの事ことももいいふふくく發はつ動どうととらられれ正ただしくしく盜賊とうざくののつつああせせりり虚言こゝろごころご

ありありししととりりやや

一いつ月げつ三さん日にち巳し日にちののちちもも火ひれれ入いりり去さるる去さるる法ほふ法ほふくく焼や出いりり

一 月五日六日小車りて條幡漸く流うせぬ
 一 さまさへ大社大伽藍及び熱して大家れ器々音
 山岳も震働一 天柱も折け地軸も折るるか
 おりふらりすさまじい見方あり 御築地
 本どの厚サ六尺有餘の土を流らぬは確々述らる
 我本あど悉く焼はじく土中といふものなり
 たらりのありいんや町家れ焼たれをうん
 只瓦礫のころぐりさく沙まじり番町京中小婦人
 女ありといふ振方も有べきなりみそ又ハ猫鼠を介

虫類の生ものハさうあり空を飛諸るおふさぐ
 眼よさくぶらりのたりとも南ハ七条通
 北ハ此系野鞍馬口の聖印まで西ハ千本
 通 但一ニ条より北の方みくハ中々通
 川のもあまで只曠くくして眼れかざるおは
 海く小怪異の火災小しそ
 一 焼失の町敷家敷大丸等ところろよ便せてたよ
 記る

焼失町敷 丸三子百餘町

新編卷中

同家数 凡十八万三千三百余軒

同寺数 凡九百二十八ヶ寺餘

内 二百一ヶ寺ハ本寺
七百八ヶ寺ハ末寺

同塔数 凡七ツ
本寺寺 本社寺 妙蓮寺
妙蓮寺 妙見寺 相心寺
誓教寺

同 所所様 凡三百六十ヶ寺
公家方 凡三百六十ヶ寺

或人ハ 凡三百六十ヶ寺
或人ハ 凡三百六十ヶ寺

幡三間づみ 凡三百六十ヶ寺
幡三間づみ 凡三百六十ヶ寺

百五十五里餘 凡三百六十ヶ寺
百五十五里餘 凡三百六十ヶ寺

同焼地差数 凡五万八千三百餘

内 八千六百餘焼地
又万二千餘焼地

同控我人數 凡三百六十ヶ寺

凡九ヶ寺 凡三百六十ヶ寺

一又焼地 凡三百六十ヶ寺

公郷方 武家方ハ略之

○相心寺の本堂 浴堂裏門

但一塔及九ヶ寺の内
あ、か、こ、七ヶ寺の内

○上の御霊社

○西陈本隆寺

○同 淨福寺

○西本願寺 但し御門一ヶ所 藁不靴樓焼失と

○东六条招穀所

一 寺社境内の法守或ハ土蔵門あどかどあり
たるものり或ハ喜例焼く表あくあり又ハ表あ
焼て裏あくありをどさぬぐありとつどを
一ツく記さふいとぬりし給ハ今又も
一 火災し薪糸代糸價玉て災し銀一匁又白糸

三合又夕油一合代續百文又ぞうり百文又二二ぞく
草鞋百文又二足又餅一ツ廿四銅焼飯一ツ三十
錢とくや物れどくをればからかして火中を遊ま
ゆらうどを死にるものもぬし水を吞で遊る
事あれば息し入る死にるもの駒し又指しり
押落され或ハ踏殺さる焼死るものあり死人の
さぬぐ筆紙よ重しがししは色ハ美人の位と
いども鹿菜湯飯ふとぬすいんや庶人ふあり
てハ三食を合くせざるものぬし給る小湯よ

子建賢雅との御志めしどをかりしふりて
未日目のとらざるよる物價を減して平生の
ぶくありし一合く申仁政正し給よるそと
宵雅も亦くもおびたりぬ

○正月清月番の火清役丹波菟山に城を青山下
野守敷也其外城別渡江は膳石子別菟山松別
高槻和忍郡山等進と馳せるとありひるき勤切あり

とくや

○焼後芝居ハ勿論それほどの教師多くいばくま

のりたん暫し一ハ京師を寂寥たすしがいまごやど
ちうく旧条東の芝居少く竹中儀をまが人ごさう
芝居を始しよるは法お小芝居始り繁長うねさ
表ハが怪はよあるまそ本れごくに復りしと
是や大平の御承あまべし

○今夏六月祇園會所神輿洗ひハ例はれぬ御執
行りじくとも移りももの出さるりしあり

七日十日は神奉例年にかゝることありしととも
町中下れ灯燈ハ多く焼失し其上番所の困

竊たれば大に略して執る所を焼くは塔ふ二ツ
 かけしあり七日の祭終山拜のわざりおと山を
 くり七つ引渡し拜のま所れ會所不焼くおわて
 見おせしむ焼失せし山拜も焼ゆつしう人形
 ちと町との會所は焼つとちと見おせしむに糸海
 多れ納涼など例業よかちりてもれさびしくぞ
 及くしと我

燒失せし山斜たのどー

函谷拜に糸馬丸あへ入お但し名お明徐俊喜れ

見送りまお女への焼ゆりたり

蠟燭山 西洞院に糸上元火災此後新不出来せしあり

ト出山 綿中修馬丸あへ入お焼ゆり

郭巨山 口糸西洞院を入口あり

船拜 新町に糸下元所お焼失せ

菊水拜 室町に糸上元町

観音山 新町六角下町

○年頃九条ゆりみ住居はる糸登何某とりや
 いある者あり生得志よかざる男ありしが

この度々大出を幸れどく喜び穀類價を
 ひさばり白米純小三合餘をとりつて鳥目
 百又ふくまがり人を見とたがひくといふと
 けつに其をさしを改めあつて一人の男は
 まゝた林をてまのしを求めんとしめり
 其高價をさげり北地の人れ難儀を顧
 見たまるとさしめつめつといふとさしめ
 も同入とこの男涙をながしてつと
 又明日日來つて深く是とんとたといふ

主人いよく承引せし油日とまてて
 此言葉と吐く外不安さるれば求
 りなきよと大に悪言ははくといふと
 いんざんあつてけつははあつて外に
 一たし人價高くさを貴店れ外求む
 所方の一安とりのつてあつてた
 相應れ價を取たまふと上天福と貴家
 小降し一安とるをさしめくよか
 いんざん主人たよといふ海益之長言高

平 行 末 中

家と坊ぐ海とどく物見せんと首さうどと
 佐かんぞり立んとるこのとれ彼の男たを
 小怒と彼米をを引佐かんで二二間投付る
 其時始終と見居たる人と物も氣味う
 ヶ折れゆくさん入のめれは万人の見せ
 免より悪き米やうまそとさんぐくは打
 たよりうまはゆれゆくぞ育くと彼米
 登はさんぐく小投打き人をゆれもなうう
 が漸か付き後の先米とらひ物の價は

下一かバ人と齒肉の難儀とのがはは米や
 と投し人のさそく音人ゆそ人と
 うろこびらふとぞ

○二月朔日頃の事かこよくと住居とを
 泥乃と赤神あてこまうひける折節
 草鞋とあまをれりつ足のあこひ
 六十又ありといふ人其高價ととむ
 海くくものさしれ直段もまひのむといふ

一人は男は場ふ来かると扱へ高き草鞋の
 ちまりのうまを去ふた能やのん某じ
 は百足討と跡は買とるべしと荷ひ
 取れりしとをかひ扱ぐいふふは色どを
 故さび人々ゆゑにあらうらひ商人打よ扱
 けりしひめく内は草鞋をひし人
 荷をもつと控へあつても逢先く行方を
 志はひかた男は草鞋と多くあつた
 人こふ分あつて人を以て神とつ扱へも

○燒地は内十分燒ぬとたれりひしと
 街甲しつらぬし又寺社方堂上りふ
 火中よ街り西へるをあり花山院殿
 廣幡殿及び其外七八ヶ所蹟あり
 古依りて後補をくとのるをたりの風れ
 吹廻しれユ合あやの人のいふあま
 風強くして吹切らる故にいふと信
 是を知るる守又土佐守殿を愛花山

院殿をどくは往古よるを梳とらみて火災と
 守りしよ今度れは木中人力の及ぶる
 所彼が通力やく院を止めしは実の奇
 妙れ事ありと感ぶる人もあり又借
 よるにその其梳をなれ汝汰ののたに
 狐福強勸請でし御を補方小焼え火を
 一方まくりあり又今度火災強進を
 西を悉く梳をなれあそあはたは梳れ
 通力あり災をぬぐもよといふべし

あつ時ハ八百方此御神日夜守護り
 禁庭ハ何れ冬上し申ひしハ八百方
 此御力きりひあは及ぬバざるな程火消
 上り此梳ちるハ内裏あも口又是御
 よね事あり又花山殿土依屋敷を
 と守りしつ絲己ま左程の通力あは
 日本國れ眷属悉くかり集免禁庭を
 ど救ひ奉らるる普天の下卒去れ
 王地ありざる所なり一むぬかすは書はる

と夢を枕んとすまゆと例よりさうとさ
 (是)をそこりたまふたれが畜生れ後す
 けいじと換抄とわかく庚申侍の夜も已
 小三更もよどだぬ

○方廣寺則大弘願境内裏借を小年頃世を
 絶く住あり人又雇られ日成送る男あ
 りいけをも未ぬより起く飯をかした年あ
 めど洞て夜たぬをゆる雇ひあふる主顧
 此方小あつ休まらぬ勤め働さける變拍

此男あくと育たふが頼寺の浪士上田何
 某此方又月と出入りけるが正月晦日此曉
 例のどく彼方へ行んとあく起るふがあ
 まり風烈補凄涼くをけし色ばいほもよ
 りと起く表ふと出あれりたをち
 見えり存た中りに合傍を此男一人を
 も大風小眠と免て同あ表初よと出く
 ぬ人志ざりおびりりて居けりうら
 清水れあさりともねがりさり此の炭

音夢卷中

十六

ふりこりてとろとろと煮けしぐたさ大津れ
 ぬと火をての飛出るとする内は又一文
 と飛くは糸河東れ方ふ落り怪しと
 えやの内は火二抱れ柱のどくは
 立ち字留ふ登る半凡にみ百丈その
 勢天ををばらぬかんと人へーグ上るを
 せんぐみまけて足内ゆきく持渡
 うせぬは一人一毛立て怒りしと思
 孫は是れまどと人えんど教色とれどく

内は進入してとろも夜れゆかしく夜
 具打りげたおもいん念佛して居り
 しが暫くあそ表れかこは高く火事
 ふいといふるあ我この大風小いうあふ
 者う火とあやまてる持と立出んま
 先さふ火の立昇りするあそ持り
 し世ふいふ火柱するありと持り
 が是業とやいふたんとこれ男上回氏
 此語少く語りしとあや

一今度火中よめて焼死横死せしものなる
 死骸此有而上系れ分ハ二条川系小江
 中系ある分ハ二条川系に出し下系有
 分ハ松原江川系よ持出さす也所録れもの
 尋来ると傳く是を後させぬふされど
 も救日の後津かなよ宿志をさぐる死骸
 於の幾八百余ふ及ぶものく東山南無
 地藏穴小葬るといふもぬれ死人穴
 残埋みくちた堆積すのたまきやも

いまのご十分れ一あも及び是も依く公れ
 命と蒙り二条通おみや川のあゝ穴と
 三ツ堀らせくは内小葬ひくしめ無縁
 引導れ免塔を建て後世伝ふはひむ
 其後三月廿日ある日海らまのて花頂山
 智恩院よあわて山下れ僧気志く集り
 大法會を執りさせたまふ方丈に
 導師みまをせぬひ来迎に接れ念誦を
 海まのくし一急修名れ濟声れうらふ

了出

一

攝取てりしゆれ光明くわうめう何なにもあゆみく十じゅう方ほう世せ變へんとては
 て火災くわい諸しよ難なんれ亡なほ者しやのつふもさうありま
 本國ほんこく土ど悉しつ皆け成じやう佛ぶつううがうがうあをあをたうたう我
 是こゝののかかくくて一七いちしち日にちれ法ほう會え滿まん座ざしして願ねんん
 くくはは功こう德とくととりりくく平へい等とう一いつ切きつ不ふ施せしし同
 卜ふくく菩ぼ提だい心しんとと發はつしして安あん樂らく國こくにに住じゆう生せうせ
 めんめんとと結けつ願げんれ磬けいおお鳴なりししああへへ聽てう流りゅうのの奏そう
 賤せん傳でん閱えんれ輩たいふふああららののてて隨ずい喜きれ泪なみだと
 湯ゆととららりりごごかかるるしし濟ぜい惠ゑありあり或ある人ひとれ

待ふ

長安ちやんあん失しつ火くわ戊ご申しん年ねん万まん戸こ千せん門もん盡じん作さく煙えん
 為な役やく道だう場じやう做しよ薦せん福ふく靈りやう魂こん此こゝ日にち應おう歸き天てん
 是こゝややむむりり養やう和われれ頃ころ五ご幾さ年ねん飢うへて死し人ひと
 途と小せう滿まんししが仁にん和わ寺じれ降かう曉せう法ほふ中ちゆう深しんく是
 と歎なげききののままははれ聖ひやうととかかままししひひて我われれ
 死し首くびれれんん由よし依よじじるるふ阿あ字じととかかまましして縁えんと
 むむととばばああむむりりととああんんせせれれけけりりふふ京
 けけ中ちゆうゆゆへへ一いつ条じやうよよりり中ちゆう南なんへへ九く条じやうままりりて東ひがし京きやう極ごく

よるを西来崔まうてに万三子三百金有る
 死人と盡く葬り玉ぬとむうも今も
 かまぬ佛門乃廣慈貴むぬ一御ぐし

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

花幼集都察院中 終

